

ことりさんの話

烏何故なくの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生存報告兼執筆の坎を戻すための短編です。

目次

ことりさんの話

1

ことりさんの話

“くりみつさん”の話が聞きたい？

へえ。変わった人ですね。

でも違います。“くりみつさん”じゃありません。“ことりさん”です。

お兄さんが言ってるの、うちの村に出るおぼけの事でしょう？

あの、足が長いおぼけ。

“ことりさん”なんです。今は。

はい。名前が変わるんですよ。しよつちゅう。

そう言うおぼけなんです。

誰に聞いたんですか。今は“ことりさん”なんだから、“ことりさん”って呼ばないのに。

…全部説明するとちよつと長くなりますけど。構いませんか。構わないんですね？

“ことりさん”はモノマネが好きなんですよ。

痰が絡んだガラガラ声で、いろんな物のモノマネをします。

私達は「ことりさん」が家に来たら、鳴き声に応じて反応を返してやらなきゃいけないですよ。

はい。そうです。家に来るんです。

ごつごつした足の感じからしても多分男の人です。

いや。確かな事は分かりません。「ことりさん」の顔を見た事のある人はいないんです。少なくとも、私は知りません。

いえ、いえ。さつき言っただじやないですか。「ことりさん」って足が長いんです。

膝の位置が私の身長より高いんです。「ことりさん」はいつも窓の外に現れるので、足から上が切れて見えないんですよ。

私達が見えるのはいつも「ことりさん」の長い足だけなんです。

「ことりさん」はいつの間にか窓の外に立ってる。

いつの間にか居るんです。

今は「ことりさん」なので、ぴいぴい、ぴいぴいって鳴くんです。スズメか何かみたくに。

ガラガラ声で、ぴいぴいって。

「ことりさん」が鳴き出したら、私達はことりさんが来たね、ことりさんが鳴いてる

ねって反応してやらないといけないんです。

そうすると帰っていく。来たときとおなじに、いつの間にか居なくなってる。

だから名前がしよっちゅう変わるんです。ややこしいですけど、風習なので。

うふふ。気持ち悪いですか？

でもね。私からすればもう日常の内の一つで。

逆に、朝にスズメだかなんだかが可愛く鳴いてるのを聞くとかなりの違和感があった。

それに、そんなに悪いおぼけじゃないんですよ。

付き合っただけだと、ご褒美というか、お礼というか。くれるんです。

最近は豆とか、松ぼっくりとかが玄関に置いてあるんです。

小鳥のモノマネをしているから、お礼も小鳥っぽい物をチョイスしてるんでしょうね。

“ねこさん”だった時は、玄関に立派な鮭が置いてあったりして。

はい、食べました。いえ、特段、体に異常などは無いですよ。

家族もみんな健康です。私のおばあちゃんなんか、元気に九十七歳まで生きましたし。

それにね。私、昔“ねこさん”に助けて貰った事があるんです。

あ、〃ことりさん〃が〃ねこさん〃だった時に助けて貰ったって事です。多分〃ねこさん〃には私を助けようとか言う意志は無かったと思うんですけど。

あ、聞きたいですか？　じゃあ、その時の話をしましょうか。

ええと。私が小学生、小五くらいの時です。

暑い夏の日でした。その日は家に人が居なくて、私は一人でお留守番してたんですけど。

一人でいる家は普段より広くて、伽藍堂な感じで。子供の頃って、一人で家に入れなかつたりした事ありませんか？

留守番をしているのが怖くなったのか飽きたのか覚えてないんですけど、私は家から出て、近くのコンビニまでお菓子を買いに行っちゃいました。

で、アイス買って、帰り道友達に会って話し込んでちゃって。外に出て結構な時間が経っちゃったんですね。

まあドアの鍵は閉めたし、いいかなって思っていました。

で、家に帰って、ドア開けて。

リビングで買ってきたお菓子食べながらテレビの録画ダラダラ見て。

それで喉乾いて冷蔵庫にお茶取りに行ったんですよ。

そしたらキッチンにおじさんが居たんですよ。家族でもなんでもないおじさんが。見知らぬ人って訳ではなく。私が通学路に行くときに横断歩道で旗持って立ってて。「気をつけろよお」って声かけてくれる人です。

私、窓の鍵を閉めた記憶は無くて。多分、泥棒するために窓から入ってきたんですよ。

私はびつくりして声も出なくなつて。おじさんが泥棒つて事にも思い至らなくて。そしたらおじさんがいきなり私の胸元を掴んで、私を投げ飛ばしたんです。

多分おじさんも焦ってたんでしょうね。

私は床に叩きつけられて、頭が割れるように痛くて、もう死んじやうんだと思いました。

おじさんは私に向かって歩いてきてたんですけど、びつくりしたような顔をして急に立ち止まって。

なんだろうと思つて後ろを振り返ると、「ねこさん」の足がリビングの大きな窓の向こうに見えたんです。

あんまりにもタイミングが良かったので、おじさんを「ねこさん」が見咎めてるみたいで。

おじさんはうつかり、「ねこさん」つて言ったんです。早く帰つて欲しかったんですよ。

うね。ちゃんと声を聞かなきゃいけないかったのに。

その言葉に被せるみたいに、「ねこさん」は「わん」って言ったんです。

この時、「ねこさん」は「ねこさん」「じゃなくて」「いぬさん」だったんです。

分かりにくいですかね。つまりその時、あれは自分を猫じゃなくて犬として扱って欲しかったんですよ。

怖かったですよ。

「いぬさん」のわんわんって声で、だんだん怒声に変わっていった。

怒ってるんだって事がすごく伝わってきました。

わんわんからギャンギャンって感じで……。

だんだんと、窓の向こうの「いぬさん」の足が、ゆっくりゆっくりくの字に曲がっていったんです。

だんだん膝の位置が下がって行って、腰が見えてきて。

長い体を折り曲げて、家の中に入ってこようとしてたんです。

私はあんまりに怖かったから、そこで気を失ってしまつて。

気付くともう外はオレンジ色に染まっていて、おじさんも「いぬさん」も居なくなつてました。

次の日から、「ねこさん」は「くりみつさん」に変わりました。

「気をつけろよお」って窓の外から声をかけてくるようになったんです。

…お兄さん。

「くりみつさん」の事を誰に教えて貰ったんですか。

今は「ことりさん」なのに、誰が「くりみつさん」って貴方に教えたんですか？

はあ。学校帰りの子供たちに。

…あー。あーあー。

多分、お兄さんの身なりが良かったからですね。お兄さんが裕福そうだったからです。

「くりみつさん」はね、お礼としてお菓子をくれたんですよ。

アイスバーのファミリーパックとか。

本当のくりみつさんは、まあ泥棒行為をするくらいですからそんなにお金は持つてなかったでしょうが。

でも大人がお礼として子供に送る物としては、まあそこまでおかしくないのかな。たまに、ゲームのカセットとかのまあまあ高価な貰える事もあったんですよ。

でも「ことりさん」になつてから、お礼もしよっぱくなつちやつたんですよ。くりみつさんよりも裕福そうなお兄さんなら、どんなお礼をしてくれるんだろう。

その子供達はそう思っちゃったんでしようね。

一応、お兄さんの名前を覚えてください。

念のためですよ。念のため。うふふ。